# 戦後70周年記念特集 取材レポート

## ～一人の作家を通して考える平和と人権問題～

戦後70年を迎えた今夏。薄れゆく戦争の記憶を語り継ごうと、連日、全国各地で戦争を取り上げた報道やイベントなどが行われ、平和の意義を問いかけました。

歳月に節目をつけて、体験者の話を聴き、考え、語り合うことはとても大切なことです。しかし、一過性で終わっては、思いの詰まったバトンも次の世代にうまく引き継げません。

歴史を多角的な視点で正しく認識し、平和について自問自答し続けることで、私たちは初めて戦争の呪縛から解き放たれるのではないでしょうか。深刻な社会問題となっている偏見や差別なども、同じ要素が深く関わっているように思われます。

来月4日から10日は人権週間。

みんなが幸せを共有できる社会を築くための鍵は、一人ひとりの心の中にあります。

今回、原爆体験者でもあり、ハンセン病と向き合って生きてきた作家風見治氏の半生を通して、そのヒントを探ります。

ヤフードームの約2・2倍の広さを持つ鹿屋市の国立療養所、星塚敬愛園。人里離れたこの地に、ハンセン病の後遺症を抱える高齢の方々が、今も静かに暮らしている。

ハンセン病は「らい菌」に感染することで発病する。主に、皮膚や末梢神経が侵され、体の一部に変形をもたらすことから、当時の人々は「らい病」という名で恐れた。明治後期から昭和前期、恐ろしい伝染病として患者の隔離政策が行われたことで、偏見や差別は一層助長されていく。患者は強制的に家族から引き離され、外を自由に出歩くことも、ひいては子どもを持つことさえ固く禁じられた。その後、治療薬が開発されるが、国の政策は続行され、1996年、偏見の元凶となった「らい予防法」にようやく終止符が打たれることになる。

今では、早期発見と適切な治療で、後遺症を残さず完治できるが、一世紀近くかけて擦り込まれた負の意識は、そう簡単に拭い去れるものではない。

風見氏も、この地に暮らす83歳の元ハンセン病患者。風見という名前は本名ではない。ハンセン病患者はまた、身内に差別や偏見が及ばないよう、本名を伏せ、偽名で生きることを余儀なくされていた。風見氏も、故郷である風頭の「風」の文字をとって「風見」の名前で生きてきた。

同園の高齢化は進み、最多で1千人超だった入所者は、現在160人ほどにとどまる。広大な敷地に整然と立ち並ぶいくつもの寮には、空き部屋が目立つ。「八重岳寮」の居住者にいたっては、風見氏一人となって久しい。今年3月には、十数年連れ添った愛犬「ムンク」も旅立った。外界のざわめきとは無縁の、静寂の時間がゆっくりと流れる部屋には、所狭しと本が並べられ、その下方には、「ムンク」の写真と絵が幾重にも置かれていた。

風見氏は、数年前、右目を失明した。どうにか輪郭をたどれるだけの左目と、大きく変形した手指で仕上げたであろう愛犬の絵は、心にぽっかりと空いた穴を必死で埋めようともがく、風見氏の叫びにも思えた。

風見氏の描いた愛犬「ムンク」の絵

風見氏は、1932年、長崎市の中心部を見下ろす山にある風頭町というまちで、8人兄弟の7番目として生まれた。メンコやビー玉遊びが大好きな、ごく普通の少年だった。転機が訪れたのは小学5年生のとき。手や顔に大豆ほどのこぶができ、病院で診察を受けた結果、判明したのがハンセン病だった。大学病院の階段で、病名を聞かされた風見氏の母親は、その場に泣き崩れたという。厳しかった父親も、その日を境に、息子のやること、なすこと全てを容認するようになった。失意に暮れる家族をよそに、事の重大さをまだ理解していなかった幼い風見氏だけが、ただ一人はしゃいでいたという。

周りの目が厳しかった時代、家族は風見氏の療養所入りを迫られた。あらかじめ、療養所を下見した兄は、高い壁に囲まれた施設の不気味さに、弟のふびんさを思ったという。家族は結局、風見氏を一時、親戚の元に預けることで強制隔離を逃れ、ほとぼりが冷めた頃、自宅に呼び戻したのだった。

長崎に原爆が投下されたのは、発病から2年が過ぎた頃だった。1945年8月、風見氏は、爆心地から約4キロ離れた風頭町の自宅で、かすかな爆音を耳にする。軒端の陰から様子をうかがった次の瞬間、青白い強烈な光に包まれた。とっさに逃げ込んだ家の中を、今度はすさまじい爆風が襲った。明るかった空が灰黒色に一変し、黒い雨が降った。眼下に広がる見慣れた街並みは、みるみるうちに大きな炎に呑まれていった。

風見氏は、家族と着の身着のまま自宅を後にし、市外にある親戚宅へと逃れた。その間の記憶は所々途切れ、定かではない。ただ、その場に漂う圧迫した異様な空気感と「死」の恐怖だけは、脳裏に焼きついて離れなかった。この日、何の前触れもなく、何万という人の未来が奪われた。その現実は、時間の経過とともに、うずきを伴って風見氏の心に暗い影を落としていく。「戦争は殺すか殺されるかの選択肢しか持ち合わせない」と、風見氏は言う。一度始まった戦争は、いつの時点からか独り歩きを始め、人の心をまひさせていく。「大切な人を失う、やり場のない心の機微を、戦争経験のない今の人達に違わず伝えることは本当に難しい。いつも自分がもどかしくなるんよ」と力を込めた。風見氏の長兄は満州の地で戦死した。貧しさゆえ、現地に行って息子の最期を見送ることもままならなかった両親の無念さに、思いを重ねた言葉だったのかもしれない。

20歳になった風見氏は、病気療養のため、熊本県にある菊池恵楓園に入園する。不治の病と思われていたハンセン病に、特効薬が発見されたという画期的なニュースに心踊らせるが、すでに生じた後遺症を治す術はないと知り、新たな絶望に直面した時期でもあった。病気のため、小学5年までの学業しか受けることの出来なかった風見氏が、ゲーテや太宰治らの本に触れ、文学に目覚めたのもこの頃だった。その10年後、現在の星塚敬愛園に生活の場を移し、精力的に執筆活動や絵画などに勤しんだ。

1986年、九州芸術祭文学賞最優秀作を受賞した「鼻の周辺」という作品では、ハンセン病の後遺症で鼻を損傷した主人公を軸に、修復することの意味を広く問いかけた。私たちはとかく外見にとらわれがちである。人間の本能からか、自分が常識と信じるもの以外に対して排他的な感情をあらわにし、好奇の目を向けることも少なくない。しかし、いつ逆の立場に置かされるか分からないのが人生でもある。「人は立場によって異なってみえる世界をもつことが出来る。立場が変化したことを理由に、昨日まで宝のように大事に思われていたものが、索漠とした風景に変わったり、また逆になったりする。健常者と障害者の立場もそうである。この世界には健常者にはみえない事柄が、障害者にはみえているという場合がある」エッセイ集「季・時どき」で、風見氏はこう述懐している。

数年前、初めて風見氏と会ったときの言葉が浮かぶ。「悲劇の人に終始していては、一歩も前へ進めない。これが僕の運命なら、それを真正面から受けとめんとね」。心のよりどころを求め、見えないものをまさぐり続ける強い探求心は、風見氏を芸術へと突き動かしてきた。だがそれは、病気が完治しても、一向に偏見の解けない世界が根強く存在していることをも意味する。一体、偏見や差別の本質はどこにあるのだろうか。障害者や弱者に対して発せられる哀れみの感情も、あるいは、私たちの潜在意識にある優越感やおごりに起因する部分があるとは言えないだろうか。望まれるべきは、決して同情などではない。視点を変えて物事を見据える姿勢と、相手に寄り添う心だという気がしてならない。

発病から70年余り。これまで結婚を考えたことは一度もなかったのだろうか。非礼とは承知しながら、そんな素朴な疑問をぶつけてみた。風見氏は、即座に「モテんかった」と舌を出し、おどけてみせた。笑顔の向こう側に、あまりに多くの夢が絶たれたであろう長い歳月を思った。何よりも、自分のせいで家族の運命が狂わされたことに、今も心を痛める。「自分がハンセン病にさえならなければ」父親が生きる気力を失い、母親がため息と涙に明け暮れることもなかっただろう。自分の力ではどうすることもできない「運命」という重い十字架を背負い、風見氏は、生きる意味を問い続けている。

（取材／小田原）

体験談を語る風見治氏